
人の温もり 一人の寂しさ

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人の温もり 一人の寂しさ

【Nコード】

N4902BA

【作者名】

時雨

【あらすじ】

人を嫌い、人を拒み続けた俺。

そんな俺を、ナツや妖精の尻尾の奴らはかまってくる。

妖精の尻尾で、大切な物を思い出して行く。

「俺は誰も信じない」

俺は誰も信じない。人間なんて信用ならない。自分が憎む対象である人間であることが、一番憎い。人間はすぐに死ぬ。信用すればするほど、シヨックも大きい。だから、憎い。俺が今までで一番信じたあいつが、今までで一番憎い。

「ああ？　なんでだよ」

「お前になど分かる訳が無い。炎の滅竜魔導師」
「俺はナツだ！」

俺は今、人間と会話をしている。目の前に居るコレは、ナツ・ドラグニルと呼ばれる人間離れた人間。竜の力を持つ人間。普通なら、人間に話しかけられても無視するところだが、こいつは妙な魔力を感じるから言葉を交わしている。しかし、予想以上に話が長引いてしまった。

「妖精の尻尾に所属する魔導師。仲間との絆を信じてなんになる。お前にもいつか分かる。滅竜魔導師」

「んでそうなんだよ。お前は人を信じたことねえのかよ？」

こいつは何故か俺の意見に反論する。いちいち激昂して、何とめんどくさい事か。

「・・・ある。一度だけ、心から信じた事がある。だからこそ、言っているのだ」

「ああん？　信じたことあるんじゃないかよ」

「・・・・・・」

いちいちこいつの言葉が鬱陶しい。

「心から信じたから。あれだけ固く友情を誓ったというのに、あっさりあいつは・・・・。所詮人間の情など、死は覆せない。それならいつそ、最初から信じなければ悲しむ必要など無い」

俺の言葉にこいつは黙り込んだ。とうとう反論出来なくなったか。お前らの信じる 絆 など、その程度の物なのだよ。いい加減、夢は捨てる。

「俺達はお前を悲しませねえよ」

いきなり何を言っているのだ。訳のわからない奴だ。口から出まかせに、適当な綺麗事で場を濁す。一番、憎い。

「まだ決まった訳じゃねえだろ！ もう一度、人間信じてみるよ！」

「ふん。馬鹿な事を」

「馬鹿じゃねえ！！」

何を熱くなっているのだ。そんな言葉で、俺の心は揺るがない。もう二度と、揺らいでたまるものか。

「妖精の尻尾の魔導師は悲しませたりなんかしねえよ！」

「ほう。それで、何だと言うのだ。そんなこと分かる訳が無かろう！」

「分かる！！ きつとお前にもな！」

こいつは真っ直ぐに俺を指差した。

「妖精の尻尾に来てみりゃ分かる！」

うるさい。うるさいうるさいうるさい！！！！

「・・・興味無いな」

俺は抑揚のない声で、感情の無い冷たい声でそう言った。真っ直ぐに俺を見たまま動こうとしないこいつをおいて、俺は人気のない森の中を歩いて行った。

*

町は嫌いだ。人臭い。

人臭いのは嫌いだ。あいつを思い出す。

だから俺はこの森から出ない。森に居るのは、言葉を話さない動物と植物と水だけ。俺にはぴったりの居心地のよい場所だ。そんな俺の世界に、こいつはズカズカと足を踏み入れる。あの会話以来、毎日のようにこいつは俺の世界に入ってくる。

「見つけたぞ！ お前！ あ、ていうかお前の名前しらねえな・・・」

「人間などに名乗る名前は無い。名前などとうの昔に捨てた。人に付けられた呼び名などいらん」

「お前いつつもそう言うよな・・・」

「何度でも言うさ。俺の世界から出ていけ」

俺は木の上から、地べたに立つこいつに言う。このやりとりも何度目か・・・

「一度くらい妖精の尻尾に来いよ」

「何故」

「信じるってことの答えが、見付かる。」

「答などいらん。」

こいつはいつも、俺の言葉に激昂する。俺に答えが見つかったとて、お前になんになる。

「・・・」

「どうした？ 言い返さないのか。じゃ、出ていけ。」

こいつは黙り込んだ。そこで立ちつくしたところで、俺は揺るがない。

するとこいつは、いきなり

「じゃー俺が勝ったら妖精の尻尾に行く！ それで良いな！」

「は？」

「火竜の・・・」

こいつの頬が膨らんで膨らんで・・・

「咆哮！！」

「！！」

荒ぶる炎の渦を吐きだした。咄嗟に俺も、空気の壁を作りはじいた。すると、横に気配が・・・

「俺はこつちだ！」

「！ それを狙いか！」

俺の目の前が炎で埋め尽くされている。こいつを見失ってしまった。その間にこいつは、俺の横まで来ていたのだ。くそ、こんな至近距離では空気の壁が作れない……！

「火竜の鉄拳！」

「ぐあっ！！」

炎を纏った拳。俺は無様に地面に叩きつけられる。人間と接することを拒絶した俺は、いろんな人間と戦ってきた。しかし、こんな奴に出会ったのは初めてだ。背中を打ちつけ、立ちあがれない……！こいつは勝ち誇ったように笑い、

「俺の勝ちだ！ んじゃ、ギルド行くか！」

「お、おい！ 待て！ 離せえ！！ 触るな！！」

こいつは俺の服を掴み、ずるずると引きずっていく。しかし俺は無様に呻くだけで、抵抗できなかった。俺の世界から俺は引きずり出された。

*

「着いたぞ！」

「知るか！」

俺は背中をさすりながらこいつの後を歩く。こんな奴に反論する気も起きん。周りが人臭い。人通りの多いこんなところ、さっさとおさらばしたいのだが、生憎こいつは強い。渋々俺は、ギルドの中へ入っていく。ああ人臭い……。中には大勢の人間がいた。がやがやうるさく騒ぎ、浮かれた連中。 絆 とは何だ？こいつは何が言いたかったのか……

「お？ ナツ、誰だそりゃ」

一人の男が俺を見てそう言った。紺の髪に、何故か服を脱いでいる変な人間。

「わかんねえ」

「はあ！？ わかんねえってどういうことだよ！！」
「こいつ名前言わねえんだよ！！」

何やら二人は睨み合いを始めた。子供っぽい奴らだな……。しかし、そんなことをやってると俺の存在は結構目立つ。奥のバーカウンターで酒を飲んでいた、小さい老人が話しかけてきた。後ろの白髪の女も、何やら笑みを浮かべながらこつちを見ている。

「おうナツー！ そいつは誰じゃー？」

「じっちゃん！ こいつギルドに入れてくれ！」

「は！？ ちょ、おま、何言ってる！？」

動揺して逃げようとする俺の腕を、こいつ力いっぱい握ってやがる。暴れる俺に全然動じていない。

「騙したなてめえ！！」

「ほう。新人か。ミラ！ スタンプ持ってこい！」

「はいはい♪」

老人と女もさっさと話を進めてしまっている。女が何やらでかいスタンプを持ってきた。

「どこに押すのかしら？」

「いやいや俺入らねえ！！ 入らねえよ！！」
「じゃ、ここに押そ」

俺のことを全く無視して、俺の腕にスタンプを押しつけやがった。ギルドマークが腕についてしまった。俺は慌てて擦ったが取れない。

「なんてことしやる！ 俺は人間と慣れ合うつもりはねえんだよ！！」

そんな俺の反応を見て、老人が

「おぬしにも色々あつたんじやろうがな、人間は孤独には耐えられないんじや。勿論孤独を好む者もいる。でも、誰一人孤独には耐えられない。一人の寂しさは、おぬしが一番、良く知っているはずじやろ？」

何でこいつは俺のことをこんなに知っている？くそ、滅竜魔導師が余計な事まで喋ったな。

・・・一人の寂しさ、か。そんな物とづくに忘れた・・・筈だったのに。俺の心が、揺らいだのを感じた。俺が、こんな言葉に揺らいでしまうなんて・・・。

「ゆっくりでも良い。このギルドにいれば、きっとおぬしも人の温もりに気付けるはずじゃ」

「・・・。」

「おぬし、名前は？」

「・・・好きに呼べ。俺に名前なんか無い」

俺は強情に、名前を隠し通した。人間の言葉に揺らいだ自分が、憎かった。俺は何故揺らいでしまったのだろうか・・・？俺はその

思いも、人間に明かすことは無かった。

*

俺は不本意ながらも、暫くこのギルドに滞在することとなった。人間と慣れ合うつもりはない。ただ、俺のあの揺らぎ。俺を揺るがした理由を見つけたかった。あんな言葉が、何故俺を揺るがしたのか。

ただ、このギルドの人間はやたらと人と慣れ合う。俺に話しかけてくる。最近特に多いのが、この金髪の女。鍵をじゃらじゃら付けているから、精霊魔導師だろう。

「ねえ、貴女名前は？」

「……。」

「ねえ、教えてくれても良いじゃない」

「……。」

「ねえ、おーい聞こえてる？」

「……。」

「無視すんなー!!」

「うわっ!!」

無視を続けていたら、上からチョップされた。全然いたくねえが。

「……何すんだよ」

「やっと喋ってくれたわね。貴女の名前を聞いているのよ」

無邪気な笑顔を向けてくる。やめろ。やめてくれ。嫌な思い出が蘇る。

「無い。好きに呼べよ。」

「無い訳無いじゃない！」

「少なくとも、お前なんか俺の名前は名乗らない」
「むーっ、そんなだとすぐ嫌われるわよ」

しつこい奴だ。何で俺にかまってくるのだろうか。俺なんか無視して、他の奴らと慣れ合っていればいいだろうに。

「好きになつてほしいと思つた事も無い」

「・・・本当に？」

「何が」

「本当に人が嫌いなのか？ 貴女」

「何故そう思う」

「だってなんだかんだ言つて、このギルドに居る。無愛想だけど、皆の話にも耳を傾けてくれる。本当に貴女は、人嫌いなのか？」

こいつは俺の顔をじつと覗きこんできた。揺らぐ。俺が、俺の心が揺らいでしまう。また・・・

「嫌いだね。あいつに死なれて。心から信じたあいつは・・・もう」

俺はそれだけ言つてギルドを出た。最初から無視して出ていけばよかった。こんなに長居する気は無かった。もう、このギルドに、この町には来ない。懐かしい俺の世界、一人の世界へ帰る。

「心から信じたつてことは仲間だったんじゃないの！！」

後ろからあいつの声がした。

*

仲間　俺がずっと嫌ってきた言葉だ。でも今は何故か、そんな言葉に、揺らいている。

「仲間だから帰るんだよ。ギルドに」

「俺が・・・仲間・・・」

俺はただこいつを見ていた。何でか、こいつがいる事が嬉しかった。こいつに居て欲しかった。こいつの言葉が、嬉しかった。こんな気持ちは・・・

「ウホオオオオ!!」

「ッ!　森バルカン!」

大きな雄叫びをあげて飛び出してきたのは、この森に住む森バルカン。いきなり殴りかかって来そうだ。すると、俺の体は俺の意志に関係なく遠くへ倒れ込んだ。こいつか。こいつが、俺の体に覆いかぶさっている。俺は、守られたのか。さっき俺の居たところは、森バルカンの拳がのめり込んでいた。すると、こいつは

「火竜の翼撃!!」

「ウホオオオオオ!!」

魔法で一気に森バルカンを吹き飛ばした。俺は立ち上がる事さえできずに、こいつの後ろ姿を見詰めるばかりだ。

「ナツ・・・何で守った・・・」

「仲間だからだろうが」

嬉しかった。嬉しかったんだ。こいつの言葉が。ナツの言葉が。俺は　一人でいる事の寂しさを、思い出してしまった。知らない

かった頃には戻れない。

「俺は．．．一人にはなれないよ．．．」

あいつが死んでから、俺は頑なに人を嫌い、拒絶し続けた。
そんな俺を、ナツは抱き起した。

「当たり前だ。俺も、誰だって一人じゃ生きていけねえんだよ」
「．．．．ナツ．．．」

俺の頬に、涙に紛れて流れたのは涙だった。今までずっと、流さなかつた涙。

「．．．．うつ．．．うつ．．．」

声を出し、泣いていた。ずっと、ずっとそうして泣いていたのだろつ。俺は、一人の寂しさを、人の温もりを思い出してしまったから。

「ギルドに帰ろつぜ」

ナツは、満面の笑みで、俺にそう言ってくれた。

「ああ．．．．帰ろつ。ギルドへ．．．」

*

「おう。帰って来たんじゃない。おぬし。帰って来たという事は、答えに気付けたのか？」

「．．．．ああ。それと．．．」

俺を見る、仲間達に俺は

「俺の名前はエアリア。そう呼べ」

初めて自分の名前を名乗った。俺は、妖精の尻尾のエアリアとして、生きていくんだ。

（後書き）

どうでしたでしょうか？

文才が無いので、上手に描写できませんでしたが気付いてくれましたか？

主人公は女の子ですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4902ba/>

人の温もり 一人の寂しさ

2012年1月13日16時57分発行